

# 日本在来馬と西洋馬

## —獣医療の進展と日欧獣医学交流史—

小佐々 学<sup>†</sup> (日本獣医史学会理事長)



### 1 はじめに

今年の干支は卯年なので、『古事記』に記載されている有名な「因幡の素兎」の話を取り上げてみたい。兎が隠岐島から因幡国に行くために、鮫をだまして海上を渡ったことがわかったため、兎は鮫に皮を剥がされて泣いていた。

そこを通りがかった大国主命の教えに従って、兎は真水で体を洗って蒲黄がまのはなを敷いた上に寝転がって休んだところ、治癒したとの記述がある。この故事は、永年にわたって医学関係者により日本最古の医療行為とされ、大国主命は医学の神様とされてきた。

一方、筆者が大学の講義や講演会で言い出すまでは誰も言及しなかったが、獣医史学からみれば、これは兎という動物を治療した獣医療の話である。したがって、大国主命は医学ではなく、獣医学の神様ということになる。神話時代の話ではあるが、わが国で最初の医療行為は獣医学であったのは明白であり疑う余地はなからう。

### 2 馬と獣医師

古代文明の発祥に始まり、世界帝国の興亡を経て、第二次世界大戦が終了する近代までの歴史を概観して回顧すれば、馬は歴史上きわめて重要な役割を果たしてきている。また、獣医療の歴史のほとんどが馬への医療行為の歴史であったことがわかる。そこで、獣医学の原点ともいべき馬と獣医療の歴史を理解しておくことは、獣医師という自らの職業のルーツを知り、誇りや責任など社会的使命と貢献を考えるうえで意義があるものと考えられる。

#### (1) 世界の歴史を創った馬と獣医師

馬の家畜化は後期新石器時代とされ、伴侶動物としての歴史はおよそ6000年前までさかのぼる。馬への騎乗や馬車の利用は人間の能力を飛躍的に拡大しており、洋の東西を問わず、馬の軍事利用が強大な世界帝国を生む

ようになった。軍馬の優劣や頭数がその後の世界の歴史を大きく左右しており、アレキサンダー大王の遠征によるギリシャ帝国やチンギスハンによるモンゴル帝国の建国などからもわかる通り、「馬が世界の歴史を創った」といっても過言ではない。

馬の価値の増大は、必然的に馬を扱う専門職である獣医師を生み、獣医療や獣医学の発達を促して、獣医師を育んできたのである。

#### (2) 軍記物の合戦に登場する馬

わが国においても、源義経による源義仲追討戦での佐々木高綱の名馬「生喰いけつき (生食)」と梶原景季の名馬「磨墨するすみ (摺墨)」による有名な宇治川の先陣争い、源平合戦で源義経による鶴越の逆落として知られる一の谷の奇襲戦で愛馬「三日月」を背負って降りたとされる畠山重忠、また屋島の合戦で船上の扇の的を馬上から一矢で射落した那須与一、あるいは桶狭間の合戦で騎馬の奇襲により今川義元を破ったとされる織田信長、信長による京都の御馬揃で東国産の名馬を曳き連れて出世のきっかけをつかんだ山内一豊など、合戦や武将と馬に関する逸話は『平治物語』、『平家物語』、『源平盛衰記』をはじめ、各種の軍記物に数多く記述されている。「名将に名馬あり」といわれるように、人と馬は文字通り「人馬一体」となって歴史上大きな役割を演じてきたのは周知の通りである。

また、日本在来馬は永年にわたり日本人と共生してきた貴重な文化遺産であり、固有の遺伝資源である在来馬の種の保存はきわめて重要な意味を持っている。

現代の戦争のように、戦車や輸送車両、航空機、ミサイルなどの兵器が主力ではなかった時代にあっては、騎馬や馬車による戦闘、移動、輸送から兵站到るまで、馬は勝敗の帰趨を左右する極めて重要な役割を担っていた。したがって、当時の馬を知っておくことは日本や世界の歴史を考察する上でも重要なことと考えられる。

#### (3) 初期の日欧交流史と馬

一方、日欧交流史を顧みると、ヨーロッパを初めて訪

<sup>†</sup> 連絡責任者：小佐々 学 (日本獣医史学会)

〒113-8657 文京区弥生1-1-1 東京大学大学院農学生命科学研究科獣医病理学研究室 日本獣医史学会事務局  
☎03-5841-5400 FAX 03-5841-8185 E-mail: anakaya@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

れて帰国した日本人は九州のキリシタン大名らが派遣した天正遣欧使節（1582～1590年）で、ポルトガル、スペイン、イタリアを訪問して、ローマ法王やスペイン国王などに謁見して大歓迎されている。この使節は、日本最初の公式使節として日欧交渉史上に大きな足跡を残しているが、帰国時にアラビア馬1頭とともに西洋の獣医、調馬師と蹄鉄工が初来日しており、獣医史学上でもきわめて重要である。次は、慶長遣欧使節（1613～1620年）で、メキシコ経由でスペインやイタリアを訪れたが、この使節の帰国時にもペルシャ馬を連れてきたといわれている。

本稿は、このように歴史上重要な役割を演じてきた西洋や日本の馬について概説するとともに、幕末維新期頃までの日本と西洋との獣医学交流史について述べてみたい。

### 3 馬の家畜化と世界の馬の歴史

馬は哺乳類奇蹄目ウマ科の動物で、旧石器時代の人類にとって重要な狩猟動物であった。乗用馬や競走馬として使用されている現在の馬は、人が野生馬を家畜化して改良したものである。家畜化された野生馬の系統には諸説があるが、この中で乗用馬として重要なのは草原馬と高原馬である。

#### (1) 馬の家畜化

草原馬は、中央アジアから蒙古まで広く分布していたが、その野生種は蒙古野馬（ブルゼワルスキー馬）としてわずかに現存する。体高（足元から背中前方の鬃甲までの高さ）は約130cmで、中央アジアから蒙古一帯の中型馬の元になった。一方、東ヨーロッパ、コーカサスからアラビア半島まで分布していた高原馬（タルバン馬）は、その野生種は19世紀末にウクライナ地方で絶滅したが、体高は約150cmで、俊足な大型馬であるアラビア馬やペルシャ馬の元になった。南ウクライナ地方出土の後期新石器時代の馬の歯に、銜（馬銜、<sup>はみ</sup>轡の一部）跡が残っていることから、馬の家畜化の歴史はおおよそ6000年前までさかのぼるとされている。

#### (2) 中近東からヨーロッパの馬

裸馬をそのまま乗りこなすのは難しいため、実用的な轡や手綱が発明されるまで、騎乗の普及は馬車よりも遅かった。馬車の使用は紀元前2000年頃で、トルコを中心とする小アジアのヒッタイト人が馬を戦車（戦闘馬車）にして、周辺地域を征服してヒッタイト帝国をつくり上げた。紀元前1700年代に古代オリエントにアッシリア帝国を築いたアッシリア人は、轡も手綱もつけた馬に乗る史上初の騎兵隊を持っていた。その後は、オリエントや小アジアでは馬戦車から騎兵に代わっており、紀元前1000年頃にはアジア内陸の騎馬民族が周辺の農耕民族を侵略していた。

ギリシャには紀元前2千年頃に馬が入り、その後は戦闘馬車が使われており、紀元前1300年頃には馬に騎乗していたという。ギリシャ帝国を築いた紀元前四世紀のアレキサンダー大王の遠征では騎兵が活躍しており、大王の愛馬ブケファルスは現代のアラブ種と同じくらい立派な体格だったという。

古代のアラビア人は馬を神の使いと考えており、七世紀初めのイスラム教の創始者マホメットは、布教のために馬の改良増殖に力をそそいだという。このアラビア人の馬への情熱が、俊足のタルバン系高原馬から「世界最高の貴種」とされるアラビア馬を作りだした。このアラブ種がイギリスで改良されて「走る芸術品」とよばれる競走馬サラブレッド種になったのである。

#### (3) 中国の馬

一方、中国でも古くから中型馬の蒙古馬が飼育されていたと考えられ、殷代出土の馬骨や馬具から高度な馬文化の存在が知られている。その後、周や春秋戦国時代から秦の始皇帝まで、馬に騎乗する北辺の匈奴に対抗して万里の長城を築くとともに、馬の増殖に力を入れていた。始皇帝陵の兵馬俑坑には、等身大の士卒、軍馬や馬車などの陶俑が多数出土しており、当時の馬の姿を見ることができる。

漢の武帝は匈奴に対抗するため、西域に駿馬を求めて兵を中央アジアのフェルナガ（トルキスタン）へ遠征させて「天馬の道」を拓いており、いわゆる天馬・千里馬・汗血馬とよばれる良血のタルバン系高原馬が直接導入されるようになった。

古代朝鮮には現在の済州島馬のような小型馬がいたが、その後中国や匈奴の中型馬が移入されたという。

## 4 日本の馬の歴史

### (1) 日本在来馬の起源と渡来時期

日本でも新石器時代の遺跡から馬骨や歯の化石が出土しているが、これらの野生馬はその後絶滅したと推定されている。馬の骨や歯の出土遺跡を全国的に調査した報告によれば、時代的には古墳時代から中世が多く、地域的には関東で多く出土していた。また、古墳時代中期には馬具が出土しはじめ、さらに馬鐸などで飾った埴輪馬が関東で多く出土している。

縄文晩期や弥生時代の遺跡から馬骨や歯が出土したことから、わが国への渡来はこの頃からといわれていたが、現代の年代測定法では、後代の骨が混入したものとされている。

『古事記』や『日本書紀』には岩戸神話の天斑駒<sup>あめののぶちこま</sup>のように馬の記載が多く、また『播磨国風土記』や『常陸国風土記』にも馬の記述が多いことから8世紀頃には日本でも多数の馬が飼育されていたと推定される。

日本在来馬の起源については、東北アジア由来の中型

馬と東南アジア由来の小型馬という大きさによる分類法である「二派渡來說」が提唱されてきた。一方、最近の年代測定法やDNA系統解析などの研究結果から、日本在来馬は4、5世紀の古墳時代に朝鮮半島から渡来して、人の交流によって各地に広がったと考えるのが妥当とされ、定説になってきている。有名な『魏志』の倭人伝には「其地無牛馬虎豹羊鵲」とあるように、日本には馬がないと記述されているが、最近の研究は『魏志』の記載を裏付けるものになってきている。

## (2) 律令制による牧と武士の発生

大化改新後に日本でも中央集権体制が整ってくると、中国にならって律令制が制定されて、軍事上重要であった馬政を管轄する役職が定められた。701年制定の大宝律令には、左右近衛大将を御監とする左右馬寮に、左右馬頭、左右馬允、馬医、馬部などの役職が定められ、御所の厩の馬、馬具や諸国の御牧の管理を行った。また、東国には御牧、畿内近国には近都牧のほか、各地に諸国牧が設置された。

中央政府による牧の経営は平安中期には形骸化して私牧が盛んになり、牧を管理して騎乗に長けた集団が優れた戦闘能力を持つようになった。特に東国の牧から多くの武士団が形成されて勢力を拡大しており、その後の歴史を大きく変えていくことになるのである。

## (3) 天正遣欧使節と西洋馬の初来日

戦国末期の天正年間に九州のキリシタン大名により初めてヨーロッパに派遣された天正遣欧使節（天正少年使節、1582～1590年）の4人の少年は、1584年8月からポルトガル、スペイン、イタリア各地を1年8カ月にわたって訪問して、ローマ法王やスペイン国王など多くの要人に謁見して大歓迎を受けた。この使節の帰国時に、アラビア馬1頭とともに西洋の獣医師、調馬師（調教師）と蹄鉄工（装蹄師）を連れてきており、初来日の記録として重要である。使節は帰国翌年の3月に京都の聚楽第で関白豊臣秀吉に謁見して、このアラビア馬を献上した。

聚楽第に向かう使節の先頭を歩む大型のアラビア馬は、見物していた全ての群衆を驚かせた。公家の『時慶卿記』や神職の『兼見卿記』には、共に体高5尺（150cm）余の馬と記述されており、当時の日本在来馬（体高約130cm）よりはるかに大きな馬の雄姿が記録されている。また、宣教師フロイスの『日本史』には、聚楽第で調馬師による見事なポルトガル馬術が披露され、秀吉や参列した諸大名は、アラビア馬の大きさ、早さや美しさに驚嘆して大いに讚美しており、贈物の中でもとりわけ気に入ったことが記録されている。

なお、最近まで西洋獣医師の初来日は、後述するように明治初期に来日したフランス陸軍獣医師アンゴーとされていたが、天正遣欧使節と共に獣医師、調馬師や蹄鉄



図1 中型の日本在来馬「木曾馬」(木曾馬の里・木曾町)



図2 小型の日本在来馬「野間馬」(野間馬ハイランド・今治市)

工が来日したことが宣教師の手紙から判明したため、記録が284年もさかのぼることになった。

## (4) 将軍吉宗と西洋馬の輸入

江戸時代に、幕府は馬の改良目的で西洋馬の輸入を行っており、36頭余りが輸入された。8代将軍吉宗は特に熱心で、9度にわたって28頭を輸入した。吉宗の派遣要請により調馬師のケイゼルが11年間に3度もオランダ商館員として来日し、西洋式の馬術、調教法や飼育管理法などを伝えた。また、ケイゼルが献上した西洋馬医学書の内容や問答などを記録した御用方通詞の今村源右衛門が著した『西説伯楽必携』がある。この時に、西洋馬学に関する多くの知識や技術がもたらされたが、国内に広まることはなかった。

## 5 日本在来馬の種類、体高と資質

### (1) 在来馬の種類と体高

現在保存されている在来馬は8種である。体高により、中型馬（約130cm）は北海道和種（北海道）、木曾馬（木曾地方・図1）と御崎馬（宮崎県都井岬）の3種で、小型馬（約115cm）は野間馬（愛媛県今治市・図2）、トカラ馬（鹿児島県トカラ列島）、宮古馬（沖縄県

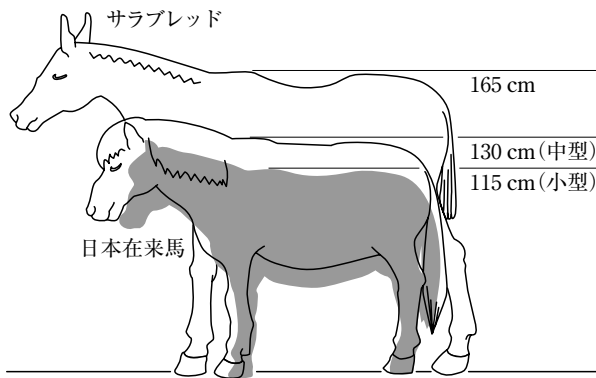


図3 サラブレッドと日本在来馬との体高の比較（小林朋子画）

宮古島）と与那国馬（沖縄県与那国島）の4種であり、このほかに中間型の対州馬（長崎県対馬）がある。

鎌倉時代末期の遺跡から出土した128頭の馬骨の推定体高の平均は129.5cmで、最小は109cmで、最大は140cmであり、中世から現在まで日本在来馬の体高はほぼ変わらなかったことが分かる。『平家物語』などの軍記物に登場する名馬でも、源義経の青海波は4尺7寸、畠山重忠の三日月は4尺7寸余、佐々木高綱の生唼は4尺8寸（145.4cm）で、145cm余がその当時に名馬とされた大馬の限界になっている。

競走馬のサラブレッド種では体高160～170cmで、またアラブ種の体高は約150cmであることから、日本在来馬は小さく、全てポニーに分類される（図3、4）。

## (2) 在来馬の頭数と体形

2004年の在来馬の総数は約2,300頭で、その74%が北海道和種で、その他は木曾馬の138頭から宮古馬の24頭までで飼育数は少ない。中世戦国期の戦闘用の軍馬は、現在の木曾馬に代表されると推定されており、消化器が発達しているため胴長短足であり、肢や蹄は堅固で、急峻な坂道での歩行に適している。

## (3) 映画やドラマの馬は虚像

このような日本在来馬の体軀や、後述するように去勢が行われていなかったことなどを考慮すると、有名な黒澤 明監督をはじめとする時代劇映画やテレビの大河ドラマなどに登場する大型馬の騎馬軍団は、存在しなかったことになる。サラブレッドに乗って颯爽と疾駆している鎧武者の姿は虚像であり、実際には小型のポニーに跨っていたのである。

長年にわたって戦国期の日本に滞在して合戦を見てきた宣教師フロイスは、ヨーロッパでは馬上で戦うが、日本では馬から降りて戦うと記述している。軍記物に出てくるような体高145cmに近い当時としては格別の大馬であれば、先陣、乗込、乗切など騎馬武者の個人的な技量により馬で戦うことが可能であった。一方、多くの馬は戦闘よりも、重い鎧を着た武者を戦場まで運ぶ輸送用



図4 小型の在来馬に騎乗する役人 [Alcock, R.: The Capital of the Tycoon (『大君の都』1859年に来日して英国の駐日公使となったラザフォード・オールコックが、3年にわたる日本滞在を記録した書)]

の乗物としての役割が大きかったと考えるのが妥当であろう。詳しいことは後述するが、日本在来馬は去勢されていなかったため、牡馬同士が集まると直ぐに喧嘩するため、西洋の騎兵隊のような大型の去勢馬による統制が取れた騎馬軍団としての行動は難しく、戦闘馬としての資質に大いに欠けていたのは事実であろう。

## (4) 武田の騎馬軍団はなかった

戦国期最強とされる武田の騎馬軍団が有名であるが、その根拠は『信長記』の「勝頼が軍勢は皆馬上達者にして…」という記述に由来すると考えられる。これはあくまでも個々の騎馬武者の乗込や乗切の技量のことであって、騎馬隊としての集団行動を評価したものではない。武田軍には個々の技量が優れた騎馬武者が多かったのは事実と思われるが、西洋の騎馬隊のように統制が取れた騎馬軍団は存在しなかったということができよう。

日本在来馬はその体型から山道や坂道での歩行に適しており、特に山国であった甲斐では乗用馬や荷駄馬が重視されて軍用に多用されたため、武田の騎馬軍団説が生まれたものと考えられる。

## 6 馬医術と馬医

日本の獣医学の歴史において年代が特定できる最初の事跡は、西暦595年に聖徳太子が近臣の橘猪弼に命じて、高句麗出身の僧であった恵慈から馬の治療法を学ばせたことである。次いで、804年に硯山左近将監平仲国が唐に留学して大延から中国の馬医術を学んで帰国したといわれており、これが仲国流馬医術の始祖とされている。また、仲国から18代の桑島新右衛門尉藤原仲綱は桑島流中興の祖とされ、1551年に『馬医醍醐』を著して弟子に伝授しており、この流派は後に徳川幕府の馬医になった。

「獣医」の文字は、古代中国の官制を記した『周礼』



図5 側体歩（ナンバ歩き）で歩く馬〔葛飾北斎：富嶽三十六景 保土ヶ谷（部分）〕



図6 馬沓（馬草鞋）〔妻籠宿・南木曾町〕

にあり、日本では1717年に齊藤定易が著した馬医書である『大坪本流武馬必要（武馬必要）』に初出する。「馬医」は、中国の律令制にならった大宝律令にあるが、明治時代の1885年に「獣医免許規則」が公布されるまで広く使われていた。

なお、日本の馬医術書としては、1267年に西阿が著した『馬医草紙』、1464年の『安西流馬医伝書』、1595年の桑島流『馬医巻物』、1604年に橋本道派が著した『仮名安驥集』、前述した『馬医醍醐』や『武馬必要』などが知られている。

## 7 古流馬術、騎乗法と馬車

### (1) 古流馬術と騎乗法

武士が実権を握った鎌倉時代になると実践的な弓馬術が重んじられるようになり、室町時代には小笠原流、八条流、大坪流などの弓馬術の各流派が確立して、流鏑馬、笠懸、犬追物の騎射三物が盛んになった。

現在では、日本でも西洋式に馬の左側から乗っているが、各種の絵巻物にも描かれている通り、江戸時代までは反対の右側から乗っていた。日本の馬の歩き方は、葛飾北斎の浮世絵『富嶽三十六景 保土ヶ谷』などにも描かれている通り、同じ側の前肢と後肢とを同時に出す側対歩が一般的であった。これは、いわゆる「ナンバ歩き」といわれるもので、省力的な歩き方で、馬上の揺れも少ないことが知られている（図5）。

### (2) 馬車

わが国では牛車は使われていたが、馬車を使う習慣はなく、幕末期に横浜居留地の外国人や公使館員によって初めて馬車を使用されるようになった。明治期に東京―横浜間などで乗合馬車が営業されるようになったが、やがて鉄道の発達により明治20年代には営業馬車は衰退し、荷馬車として残ることになった。

## 8 馬沓と蹄鉄技術の渡来

### (1) 馬沓（馬草鞋）と蹄鉄

日本の馬に蹄鉄が普及したのは、明治初期の陸軍創設時における西洋式装蹄術の導入以降であり、それまでは馬沓という藁や蔓などで編んだ馬用の草鞋を使用していた。そのためわが国の軍事行動や集団移動では常に人と馬が使用する草鞋を大量に携行する必要があり、街道沿いの宿場町では人馬用の草鞋を常備していた。

馬沓は平安時代の保元・平治の乱（1156～1159）での記録が初出とされている。また、室町時代には馬に沓を履かせたり脱がせたりする時の小笠原流の言葉使いが記述されている。このように、日本では蹄鉄は使用されおらず、古代から幕末まで馬沓が使われていたのである（図6）。

### (2) 装蹄馬と蹄鉄技術の渡来

馬の蹄を金属で保護する蹄鉄は、アジアでは紀元前から使われていたとみられており、ヨーロッパでも4世紀の遺跡から出土しているが、日本に導入された形跡はない。前述したように天正遣欧使節の帰国時に、アラビア馬と共に西洋獣医師、調馬師と蹄鉄工が同行して初来日したが、装蹄技術が伝えられた形跡は残っていない。また、8代将軍徳川吉宗が西洋馬を輸入して、調馬師のケイゼルから装蹄術を学ばせたが、一般には普及しなかった。

幕末の1859年に来日して英国の駐日公使となったオールコックは多くの馬を持ち、護衛兵のうち2名が装蹄術に熟達しており、馬丁の浅見浅吉が装蹄術を会得し、蹄鉄は鍛冶の兼吉が英国製を模して鍛造した。また、蚕の病気で大打撃を受けたフランスの養蚕業救済のため将軍から贈られた大量の蚕卵への返礼として、幕末の1867年にナポレオン3世から15代将軍慶喜に26頭のアラビア馬が贈られており、この時に装蹄技術が伝えられた。その後、明治初期の陸軍創設以来、軍馬の改良と共に蹄鉄の普及が推進され、全国的に装蹄馬の使用が一般

的になったのである。

## 9 去勢と調教

### (1) 家畜去勢の歴史

大陸の遊牧民は、家畜を従順にして管理し易くすると品種改良のために、優れた能力を持つ種牡以外は全ての牡を去勢している。3400年前の古代シュメールの粘土板に牛の去勢の記録があり、旧約聖書のレビ記や古代ギリシャの哲学者アリストテレスの『動物誌』にも家畜去勢の記述がある。中国では、最古の漢字である甲骨文に豚の去勢を示す文字があり、周の官制を記した『周礼』には牡馬の去勢についての記述がある。また、秦の始皇帝陵の兵馬俑坑の馬の多くが去勢馬である。このように、洋の東西を問わず大陸では、古代から家畜の去勢が日常的に行われていた。

一方、日本では明治初期に西洋獣医学が導入されるまで、家畜去勢の習慣がなかったのである。

### (2) 去勢法記載の文献

馬の去勢については、日本に渡来した中国の馬医書の『元享療馬集』や『馬経大全』などに明記されており、「扇馬」という去勢馬の呼称もすでに記載されている。また、8代将軍吉宗の時代に来日した調馬師ケイゼルの知識などをまとめた1730年の『西説伯楽必携』、大槻玄沢がオランダ書などを調べて著した1808年の『扇馬訳説』や、菊池東水が1852年に発行した『解馬新書』にも、西洋の去勢術が紹介されている。このように、去勢法とその目的や効果を知る機会は多かったにもかかわらず、不可解なことではあるが、日本で去勢が実用化されることはなかった。

### (3) 日本最初の去勢術

日本最初の去勢術は、江戸初期の1656年に川越城の厩で行われた。人に噛みつき踏みつけにする悪馬4頭に対して去勢が実施され、やがて馬がおとなしくなったことが、町名主『榎本彌左衛門覚書』に記録されている。この時に去勢の効果を認めながら、その後は普及することがなかった。次いで、1809年頃に仙台藩で行われており、さらに幕末期の1855年にも佐倉で荒馬1頭を去勢してその効果を認めたとの記録がある。

これらは特殊な例で、日本では明治時代になるまで去勢の習慣がなかったのは事実であり、そのため馬などの家畜の管理や品種改良が難しかったのである。

### (4) 西洋人が見た日本の馬

有名な『日本史』の著者で戦国末期から安土桃山時代の日本を見た宣教師フロイスが日欧の文化や風習を比較した『日本覚書』には、馬のことが39カ条にわたって書かれているが、日本の馬がひどく暴れることを記載している。同様に小柄にもかかわらず、日本の馬が荒く猛獣のようであったことは、幕末期に来日した西洋人も書

き残している。

駐日ドイツ公使オイレンブルグ、アメリカの探鉱冶金学者パンペリー、イギリス駐日公使オールコック、ドイツの考古学者シュリーマンらは、日本の馬は小さく体格が悪く貧弱なのに、直ぐに蹴飛ばしたり、噛みついたり、振り落としたりするため、その粗暴さや悪癖に悩まされ続けたことを記述している。

当時は、牝馬は繁殖用に飼われており、乗用や労役用には全て牡が使用されていた。小柄な牡馬が手に負えないほど暴れるということは、調教法の問題もあろうが、去勢の習慣がなかったためということができよう。

### (5) 軍馬の改良増殖と去勢

明治時代になって日本陸軍が馬の去勢を積極的に行うようになったのは、日清戦争で外国人から日本の馬は猛獣だと酷評されたこと、また義和団の乱で欧米列強の騎兵隊と共同行動したときに「わが国の出征軍馬のみは、素質獐猛であり、牝馬を見ては隊列を乱し、輸送に当たっては兵を傷つけ、実に苦心を要するものがあって、各国兵から軽蔑嘲笑を受けた」ためだという。

その後は、去勢術の普及と「馬匹去勢法」の推進により、軍馬の改良と増殖に去勢が大いに貢献した。軍馬改良のため、小型馬ないし中型馬である日本在来馬の牡は去勢され、西洋の大型馬を種牡として使用した。そのため、貴重な文化遺産や遺伝資源である在来馬は急速に減少衰退し、特に中世以来の名馬とされた南部馬などの絶滅を招く一因にもなったのである。

### (6) 騎馬民族説と去勢

日本最初の統一国家が、朝鮮半島から渡来した東北アジア系の騎馬民族の征服によってなされたという有名な「騎馬民族説」が、江上波夫により提唱されている。これに対して佐原 真は、騎馬民族は畜産民という観点から、その文化を特徴づける食習慣、家畜管理法や供犠の風習などが日本に希薄なことから、騎馬民族は来なかったとしており、論拠の1つに去勢の習慣がなかったことをあげている。

獣医療である去勢の有無を論拠にして、日本最初の統一国家の成立にかかわる重要な議論がなされたことは、きわめて興味深いことといえよう。

## 10 欧米近代獣医学の導入

### (1) フランス軍事顧問団の来日と馬事関係者

幕末期の1858年に欧米との修交通商条約が締結されると、幕府は陸軍の近代化のためフランスから軍事顧問団の来日を招請した。その結果、1867年1月に参謀大尉シャノワースを団長とする第一次軍事顧問団15名が来日した。その中に、馬事関係者として騎兵中尉・騎兵科教官デシャルムと、騎兵伍長・調教師・騎兵科副教官ペリュッセルがいた。同年3月には、フランスへの1万

5千ケースの蚕卵寄贈に対する返礼として、ナポレオン3世から將軍慶喜に贈られた15頭の牝馬と11頭の種牡馬の計26頭のアラビア馬と共に、歩兵中尉ダンクールと、調教師・種馬飼育場付伍長カズヌーフが来日して顧問団として日本に留まった。

明治時代になると新政府の招請により、1872年4月に参謀中佐マルクリーを団長とする第二次軍事顧問団がフランスから来日した。馬事関係者は、騎兵大尉デシャルム、調教師・騎兵曹長フランソワ、蹄鉄工・陸軍伍長ヴィエストであった。

## (2) アンゴアの来日と陸軍獣医官の養成

幕末にフランス騎兵教官デシャルムらの教えを受けた桑島流の幕府馬医で静岡藩士であった陸軍上等馬医の深谷周三は、馬医学務を一任されて陸軍獣医官の養成が始まり、1873年に陸軍兵学寮に馬医生徒15名が入学した。深谷らの建築により、翌年4月にトゥールーズ獣医学校出身のフランス陸軍二等獣医（中尉相当）アンゴアを招聘した。馬医学舎で5年にわたり25名に近代獣医学を教育して帰国しており、日本の陸軍獣医学の基礎を築いた。

アンゴアの帰国後、1881年に黒瀬貞次は陸軍省御用掛としてトゥールーズ獣医学校に入学し、獣医学分野では日本初の西洋留学生となり首席で卒業した。黒瀬は、1881年に日本最初の私立獣医学校（現在の日本獣医生命科学大学）の設立に参画している。その後は、陸軍からフランスのアルフォール獣医学校に柳沢銀蔵や山根定吉が留学しており、後に山根は陸軍獣医官の最高位である陸軍獣医中將になった。

1893年に、東京の目黒に軍馬の傷病治療に必要な軍陣獣医学の習得を目的とした陸軍獣医学校が設立され、後に世田谷村下代田（現・世田谷区代沢）に移転して獣医士官の養成を行ったが、1945年の第二次世界大戦の終結と共に廃校となった。

## (3) 獣医学校の開設と外国人教師の招聘

駒場農学校：1874年に東京の内藤新宿（現・新宿御苑）に開設された農事修学場は、1877年に農学校と改称された。翌年には駒場野（現・東京大学教養学部や目黒区立駒場野公園付近）に移転したが、この開校式には明治天皇が臨御され、内務卿大久保利通など政府高官が出席しており、その期待の高さがうかがえる。獣医科の教官として1877年にイギリス出身のマックブライドが招聘され、3年間滞在して初期の獣医学教育に尽力しており、農学校の開校式では外国人教師を代表して祝辞を述べた。また、マックブライドの後任となったドイツ出身のヤンソンは22年間にわたって滞在し、日本の獣医学教育の近代化に大いに貢献した。

この農学校の獣医科は、1882年に駒場農学校と改称され、東京農林学校、帝国大学農科大学、東京帝国大学

農科大学、東京帝国大学農学部を経て、1947年に東京大学農学部獣医学科となった。

札幌農学校：1872年に東京芝の増上寺に設けられた開拓使仮学校は、札幌に移って札幌学校となった。1876年には札幌農学校と改称され、教師としてアメリカ出身のクラークやカッターなどが招聘された。札幌農学校は東北帝国大学農科大学、北海道帝国大学農科大学、北海道帝国大学農学部を経て、1947年に北海道大学農学部獣医学科となり、1952年に獣医学部になった。

現在では16大学が獣医師の養成課程を設けており、国公立大学が11校、私立大学が5校である。

以上のように、幕末維新时期から明治初期の陸軍獣医官の養成にはフランスが、また駒場農学校や札幌農学校での獣医学教育ではイギリス、ドイツ、アメリカなどの外国人教師が招聘されて近代獣医学教育の導入に貢献した。

## 11 あとがき

宣教師フロイスが織田信長の安土城に招待されたときの記録や、各種の絵巻物や厩図屏風を見ればわかるように、当時の城や屋敷では、厩（馬屋）は邸宅の前方に配置された立派な建物で、床を板張りにした清潔な場所に馬は大切に飼われていた。いわゆる馬小屋のイメージではなく、厩には客間があって、客人を接待するための応接室の役割も果たしていたのである。

また、日本在来馬と大陸の馬とを比較すると、家畜としての体躯や資質、去勢の習慣がなく蹄鉄を使わないことなどの基本的な相違の他にも、<sup>あぶみ</sup> 籠や<sup>くら</sup> 鞍などの馬具も独特の形態のものを使用していた。

獣医史学の視点から、日本在来馬の歴史を顧みれば、日本は永年にわたり独自の道を歩んできており、世界に誇るべき特異な馬事文化を形成していたことができよう。このような馬事文化の違いについては、日本人の生活様式、風習、技術や芸術など様々な見方があろうが、宗教や信仰心に根差した動物観の違いを考慮する必要があるだろう。

本稿により、古代から近代まで永年にわたって獣医療を育んできた馬の史実を知り、獣医師という職業の歴史的な意義や背景と、社会的な使命や貢献について考えるきっかけになれば幸いである。

筆者は、日本に初めてアラビア馬や西洋獣医師などを同行して帰国した天正遣欧使節の一人である中浦ジュリアン（幼名・小佐々甚吾）の子孫である。2008年に中浦ジュリアンは、ローマ法王により聖者に次ぐ崇敬の対象である福者に列福された。同年10月1日に筆者は、五万人が集まるパチカンのサンピエトロ広場での謁見式に参列した。先祖のジュリアンが謁見してから423年後に、ローマ法王ベネディクト16世から手を取って祝福



図7 ローマ法王ベネディクト16世から祝福される筆者  
(サンピエトロ広場上段の特別謁見席・パチカン)

されるという異例の栄誉を受けた(図7)。これも馬が取り持つ奇しき縁ということができよう。

終わりに、本稿は平成20年の日仏修交150周年記念シンポジウムや平成21年度医学系五史学会合同例会の講演内容を、要約して加筆したものであることを付記する。

#### 参 考 文 献

[1] 帝国競馬協会編：日本馬政史，帝国競馬協会（1928）

- [2] 白井恒三郎：日本獣医学史，文永堂（1944）  
[3] 中村洋吉：獣医学史，養賢堂（1981）  
[4] 江上波夫：騎馬民族国家—日本古代史へのアプローチ，中央公論社（1984）  
[5] 佐原 真：騎馬民族は来なかった，日本放送出版協会（1993）  
[6] 松尾信一：馬学 馬を科学する，馬事文化財団（1994）  
[7] Dunlop RH, Williams DJ：Veterinary Medicine-An Illustrated History, Mosby（1995）  
[8] 日本陸軍獣医部史編集委員会：日本陸軍獣医部史，紫陽会（2000）  
[9] クリスチャン・ボラック：絹と光，在日フランス商工会議所（2001）  
[10] クリスチャン・ボラック：筆と刀，在日フランス商工会議所（2005）  
[11] Amirsadeghi H：The Arabian Horse-History, Mystery and Magic, Thames & Hudson（2005）  
[12] 戸崎晃明：日本在来馬の起源を探る—DNAによる系統解析から—，ホースメイト，41，日本馬事協会（2005）  
[13] 小佐々 学：第2章 獣医学の歴史，獣医学概論，文永堂出版（2007）  
[14] 小佐々 学：日本在来馬について—城郭や合戦と関連して—，城郭史研究27号，日本城郭史学会（2007）  
[15] 小佐々 学：日本在来馬と西洋馬—日仏獣医学交流史を中心に—，日仏交流150周年記念シンポジウム「日仏学術交流のルネッサンス」報告論文集，日仏会館（2009）